



# 多様性を受けとめて 学ぶ力を育む

## —自己を軸とした多面的理解—

### 1 はじめに—学習者の多様性と社会の多様性—

進路選択やそれに関連する社会的な側面の学びはかなり重要な位置を占めるが、技術革新やグローバル化に伴う目まぐるしい変化は、見通しをもって学びを積み重ねることをより困難にしている。社会のトレンドとして学んでも、自分の人生設計においてどんな意味があるの

か、主体として受け止めるのは容易なことではない。

少子化による大学全入時代で激しい受験戦争からは解放されたが、複雑化する社会で何をどのように選択したらいいか見失いがちである。高等教育に携わる者は学習者の主体的な選択をサポートすべきであるが、学習者の求める生き方の個別性や社会の多様性などをふまえた高等教育のあり方については十分な議論がなされているとは言い難い。

学習者が人生の様々な課題に向き合えるようにするために、高等教育の現場では何に留意すべきか。また、彼らが社会人として踏み出す先の社会との向き合い方をどのように取り上げればいいのか。

## 2 見通しが立たないことによる自動思考と思考停止

目の前の学びが自分の希望する進路にどう役立つのか、身につけた知識や技術をどう活かすべきか確たる手応えを得られないままあれこれ考えているうちに、将来への不安で身動きが取れなくなってしまった学習者の相談に乗ることは少なくない。成果を出せず自信を失って袋小路から抜け出せずもがいているうちに、余裕がなくなって柔軟な発想が困難になってしまう。様々な場面で刷り込まれたことに囚われ、強い思い込みで自分らしい思考や発想ができなくなる自動思考の状態である。立ち止まれなくなったり原点に戻れなくなったりして、パニック状態に陥りやすくなる。考え方がパターン化・硬直化してしまっ、行き詰った時に視点や方法を変えて創意工夫ができなくなり、考えることを放棄するように思考が停止して無反応になってしまうこともある。特に、見通しが持てない状況では自動思考や思考停止に陥りやすく、苦勞して学ぶことに意義を見出せなくなってしまう。自分の興味・関心のあることには積極的に取り組んだとしても、それに関連することに興味や関心を持ってないと、取り組む意義を見失ったり、意欲が低下したりすることもある。

時代とともに彼らを取り囲む情報や知識や選択肢は増大し、自由度も高くなっているように見えるが、結果として見通しを持つことが難しくなる。将来のために様々な資源を使いこなせず、自分らしさを活かして学びを深められていないのが現状であろう。

## 3 現代社会と学習環境の多様性・複雑性が学びに及ぼす影響

現代社会の多様性・複雑性は学習者個々の学習のスタイルや習慣にも大きく影響を与え、家庭環境、学校や塾などの学習環境、社会・文化的な背景など多様な要素が複雑に絡み合い、個々の学びの状況を構成している。複雑に絡み合った種々の要因の影響を理解しなければ、個々の持つストレngthsを引き出し、活用できるよう支援することは困難である。

学習者一人ひとりに向き合っ、個々の強みを最大限に引き出せる関わりや環境を用意することが望ましいが、合理化・効率化を重視する傾向の強い学習の場では、最低限の能力や環境を有しない学習者はついていけず自信を失ってしまう。

また、社会を構成する要素が多様化し、従来のように身近なロールモデルを手がかりにして自分なりの見通しを得ることは困難になっている。特に、手に入れられる情報量の増加に伴い、ネガティブな情報やイメージに触れる機会も多くなるので、そうした情報に圧倒されて初期の学習段階で身動きが取れなくなってしまうこともある。基本を十分に理解する前に「思っていたのと違う」と性急に判断しドロップアウトする。一見、学びの選択肢の多様性から生じた mismatch にも思えるのであるが、基本的な段階で生じた課題の影響のほうが大きい。当初は興味・関心があっても、学習のペースが合わなかったり、他の学習者との関係に悩んだり、一部の苦手な学習内容でつまづいたり、本質とは別のところで mismatch が起こる。自分に合った取り組み方の選択できるかどうかで、学習意欲や学習効果、学習効率などが異なる。進路とつながるような個性・多様性の高い学習ニーズにおいては、そうした mismatch による失敗体験は自信や自己評価にも影響を与え、その分野での自信喪失にもつながりうる。

## 4 学習者の自己理解と動機づけが 学びの見通しに与える影響

一方、学習の動機づけの柱となる自身の内的な基準や、その背景にある様々な事情についても多様化しており、学習者が興味・関心をもって学びたいと思えるものを見つけることを困難にしている。結果として、表層的なレベルでしか興味・関心をつかめないまま、学びの奥行や深さに触れることができずに機会を逃してしまうことも少なくない。

感動や驚きなどのインパクトのある体験こそが興味・関心や根気強い取り組みにつながり物事への本質的な理解の土台になる。感受性や感情・感覚が土台となり、気になることや知りたいことが広がりながら理解も深まり、それとともに関連することへの興味・関心も深まる。そういった循環プロセスの土台となる個々の固有の感覚を大切にしないと、主体的な学びにつながるような経験は得られない。

自分の将来に結びつきが深いと思われる学習については、興味・関心に結びつく個人的な体験だけでなく、能力や性格などといった適性についても意識されることが少なくない。特に、思ったように学習の成果が出ない場合などは適性がないと考えてあきらめてしまうこともあるかもしれない。学びのプロセスは平たんでなく、多くの困難に向き合うことの連続であるとも言える。困難を乗り越える際に、学びの方向性と自分らしさを追求する方向性に何らかのつながりを意識していると、その意義を実感できるだろう。そこにつながりが見いだせないと、何のために取り組むのかを見失ってしまうことになる。自己の感覚や意識に基づく学びの原点は、困難に出会った時に立ち戻るべき場所であり、それがあつかいによって得られることは大きく異なってしまう。

学びの原点とも言えるような自己の固有感覚を意識することは困難を乗り越えながら学びを深めるうえで欠かせない。他者に対して優位な位置を確保するためだけの、その場しのぎの学びはストレスや負担感などによって挫折しやすい。心の底から理解したいという動機に基づく学びは多少の困難があっても挫折しにくく、主体的な取り組みとして発展する可能性を多く含んでいる。

学びのきっかけは消極的で受動的なものだったとしても、学びたいという意識や感覚を大切にしていると、学びによる気づきや効力感が蓄積されて学びの意欲や関連することへの感受性が高まる。そうしたプロセスは好奇心や探究心などの自己の強みを知ることもつながり、学習への動機づけを高める。学習の支援に携わる者は学習者の自己理解のプロセスを理解し、一人ひとりのニーズに合ったかかわりを大切にすべきだ。

## 5 人間形成における基礎学習の意味と学びの拡がり ―「わからない・むずかしい、 できない・つまらない」を乗り越えるために―

基礎学習には学力そのものを高めるという目的だけでなく、目標への到達を信じて忍耐強く取り組む力を身につけるといふ重要な意義もあり、個別性の高い学習プロセスの前提でもある。受動的・消極的な学びの段階から主体的・積極的な学びの段階へと移行するには、学びというものが自分の人生を支えたり変えたりする力につながるものであるという実感を得る必要がある。忍耐強さを一方的に押し付けるのではなく、困難を乗り越えることの意味や価値を感じられるような学びのプロセスを構成することが必要である。

多少の困難が伴ったとしても、そのプロセスが自分にとって明るい未来をもたらすかもしれないというポジティブなイメージが形成されてこそ、苦勞をして勝ち取った学習の成果が次のステップの学びのモチベーションへとつながるのである。一方的に押し付けられた苦勞は次のステップにはつながらない。気づきや発見といった感動や興奮を伴う固有の体験を経て、学びという取り組みと自分の成長や活躍など、現在と未来のつながりをイメージできるような学習経験を得ることが、難易度の高い課題への動機づけになる。

学習効率を優先して追求する現場では、課題の前提となる条件設定が明確でただ一つの答えを導き出すことに重きがおかれる。明確な条件を設定することで同じ答え

が得られるので、正誤がはっきりしていて正答数や解答スピードといった結果のみで評価が可能だ。しかしながら、現実社会では状況や視点、立場などによって前提条件も異なってしまうし、時間経過とともに変化することさえある。明確な条件設定を前提としたスタイルの学びに慣れてしまっていると、自らの感覚や感性に基づいて学ぶプロセスが疎かになり、学習者に固有の課題やニーズに向き合って学ぶことは困難である。例えば、進路選択や将来設計などにつながるような単一の答えを見出せない課題に取り組む際には、手掛かりを得られずに混乱してしまうかもしれない。

一定期間で最低限の基礎的な学習スキルを習得する必要があるにしても、そうしたプロセスを大事にしなければ、何も蓄積されないばかりか、学びへの拒否反応が生じることさえある。学んだことをきっかけに気づきや実感を得てそこから理解を深めるといった、初期の取り組みを前提に学習プロセスを構成すべきであろう。設定された学習目標という事情があるとしても、それを押し付けずに、学習者の感性や興味・関心が自然にそこにつながるように、課題への取り組みにあたって生じる個々の疑問や違和感、気づきなどを共有し、好奇心や自ら学ぼうとする意思を刺激できるよう配慮する必要がある。学習者に向き合い、彼らの多様性や個別性への配慮を組み込んだ学びのプロセスをともに作り上げることが求められている。

## 6 多様性を受けとめる—様々な側面を統合し主体的な学びにつなげるために—

個々の学習者のおかれている状況は様々であり、多かれ少なかれ現代社会の多様化・複雑化の影響を受けている。そうした学習者の事情を配慮することは、学習者自身がそうした影響を受けているということを知りつつも非常に重要である。彼らが当たり前と思っていることの背景を理解し、それに対する違和感や疑問を気づききっかけを得たりすることは、彼らが問題意識をもって自分らしく主体的に学ぼうと必要不可欠なことであ

る。自分自身の多様性の背景を様々な角度から理解し、それらを全体として統合する必要がある。社会的側面、心理学的側面、生物学的側面、現在—過去—未来を生きる時間的側面など、いろいろな側面から一人の人間が構成されていることを、様々な学習課題への取り組みから学び、物事を様々な側面から総合的・統合的に理解することになる。

物事にはいろいろな側面があり、どの視点に寄って立つかで見え方が異なる。世界が違って見えることが新たな学習のモチベーションにつながることもある。物事の捉え方や考え次第で判断や行動は異なり、その結果として未来を変えることができるのである。多様性や複雑性は、ともすると厄介な問題として敬遠されがちだが、個々の側面や関連する要因に向き合い、それぞれの関連性を分析して全体像を描くことで本来の姿に近づける。多面的に理解する力を身につけ、それまで意識しなかった様々な可能性に気づき、固定観念を打破することで人生観さえも変わりうる。

しかしながら、自らの多面性に気づくことは容易ではなく、他者からの支援が不可欠である。学習を支援する者が学習者を多面的に受け止め、多面鏡のような存在となり、学習者が自らの姿を受け止めやすいように伝える必要がある。

### 参考文献

- Biestek, F.P. (1957) The casework relationship, Loyola University Press. (バーステック, F. P. 尾崎 新・福田俊子・原田和幸 (訳) (2006) ケースワークの原則 誠信書房)
- Oliver, M. & Sapey, B. (2006) Social work with disabled people. (オリバー, M・サーペイ, B. 野中 猛・河口尚子 (訳) (2010) 障害学にもとづくソーシャルワーク 障害の社会モデル 金剛出版)
- 櫻井茂男 (2017) 自律的な学習意欲の心理学 誠信書房